

質問して言うには、「恋の歌が世間では多いのはどういふことか。」

（私が）答えて言うには、「まず『古事記』『日本書紀』に見えていたやう古い時代の歌などをはじめとして、八代集などにも、恋の歌ばかり特に多い中でも、『万葉集』には『相聞』としてゐるのが恋の歌で、全ての歌を雑歌、相聞、挽歌の三種類に分け、八巻・十巻には、四季の雑歌、四季の相聞と分けてゐる。このやうに他を全て『雑』といつてゐるのであつて、歌は恋を主とすることを知らなくてはいけない。そもそもどういふわけであるかという、恋は全ての情趣にまさつて深く人の心に染みて、大変こらえがたい事柄であるからだ。それなので、大変しみじみと趣深いものは恋の歌に多いことなのだ。」

質問して言うには、「だいたい世間の人それぞれが常に心の奥深く願うことは、恋愛を思うよりも、我が身の繁榮を願ひ財宝を求める気持ちなどが、ひたむきで抑えがたく見えるのに、どうしてそのやうなことは歌に詠まないのか。」

（私が）答えて言うには、「『情』と『欲』との判別がある。まず皆人の心に様々に思う思ひは、みな情である。その思ひの中にも、『そうありたい』『こうありたい』と追い求める思ひは欲というものである。それなので、この二つはお互いに離れないものであつて、総じて欲も情の中の一種類であるけれども、また特に区別したら、人をすばらしいと思つたり、いとしいと思つたり、あるいはつらいとも恨めしいとも思うやうなことを『情』とは言つた。それというのも実はその情から生じて欲にも及び、また欲から生じて情にも及んで、一通りでなくいろいろであるが、どのやうであつても、歌は情の方から出てくるものだ。これは、『情』の方の思ひは物にも感じやすく、しみじみと感慨にふけることも格別に深いからだ。『欲』の方の思ひは一筋に願ひ求める心だけであつて、それほど身に染みわたるやうな繊細なものでないからであらうか、ちよつとした花や鳥の色や音に涙がこぼれるほどには深くはない。あの財宝を貪る類の思ひは、この欲というもので、しみじみと趣深いこととは関係が薄いために、歌は出てこないであらう。恋愛を思うことも元々は欲から出るけれど、特に情の方に深く関わる思ひであつて、生きとし生けるもの皆が避けられないものである。まして人は特にものの情趣を理解するものである、特に深く心に染み入つて、感慨に堪えられないのはこの思ひなのである。その他もあれにつけこれにつけ物のしみじみと趣深いことで、歌が出てくるものだと思ふべきである。

そうではあるけれど、情の方は前に述べたやうに、心の弱いことを恥だと思ふ後の時代の習わしに隠して我慢することが多いために、かえつて欲よりも浅く見えるのであらう。しかしながら、この歌だけは上代の昔の心構えを失つてゐない。人の心の様をありのままに詠んで、女々しく弱々しい部分も決して恥じることがないので、後の時代になつて優美で上品に歌を詠もうとするときには、いっそうしみじみとした趣をだけ主として、例の欲の方はとにかく嫌つて、詠もうとは思ひはしない。

たまにある歌でも、あの『万葉集』の三巻に「酒を誉めた歌」の類である、漢詩では常のことで、こうした類ばかり多いけれど、歌にはとても気に食わないもので憎らしくまで思われて、全く心がひかれぬ。何の見どころもない。これは欲が汚い思ひで、しみじみとした情趣がないからである。それなのに、他の国では、しみじみとした情を恥じて隠し

て、汚い欲をすばらしいもののように言い合っているのはどういふことなのだ。」